

「お年玉どこいった！？」①

—初稿—

2025/2/11

米俵

## 〈人物表〉

|       |      |               |
|-------|------|---------------|
| 橘 康太  | (12) | 長男・小6         |
| 橘 ひより | (11) | 長女・小5         |
| 橘 慧   | (9)  | 次男・小3         |
| 内野 稔  | (74) | 子供たちの祖父・さと子の父 |
| 橘 さと子 | (40) | 母親            |

## 〈ログライン〉

・康太は、お年玉がなくなったのに気付き、犯人探しを始め、妹を疑うが、お年玉を失くした同志であったことが分かり、協力することを決める話

## 〈テーマ触媒〉

・ミステリー（コメディ）

## 〈フック／テーマ〉

・子供同士のやり取り／決めつけ

1. 内野家・外観（昼）

曰当たりの良い大きめの一軒家。玄関先には溶けかけの雪と雪だるま。

玄関ドアには、しめ縄が飾られている。

2. 内野家・室内（昼）

2階の和室の客間。

橘康太（12）、真剣な表情で、スマホを見つめる。そばには、お年玉袋と五千円札が置かれている。

スマホ画面と五千円札を見比べ、溜息をつく。

1階から、康太を呼ぶ声が聞こえてくる。

女性の声「康太、ちよつと来てー」

康太 「なにー？ 今、無理ー」

と、大声で返す。

女性の声「いいから、早く来て」

康太、大きく溜息をつく。

スマホを置いて部屋を出ていく。スマホ画面には、「新作ゲームソフトのお知らせ」。

乱暴に階段を降りていく音がする。

× × ×

康太、部屋に戻ってくる。すぐにスマホをチェックする。

画面をスクロールしながら、お年玉袋が置いてあった場所に手を伸ばす。

何も無い場所を繰り返しさする。

見つからず、手元の方に視線を移す。

驚いて、立ち上がる。

慌てた様子で、ボディチェックするように体を触る。ポケットを叩き、中身をひっぱり出すが何も出てこない。

テーブルの下を確認するが、何も無い。

旅行バッグの中を確認するが、入っているのは服や下着のみ。

康太、思い出すようにしばらく考えこむ。

大きく、深呼吸する。

ゆっくりと棚の下を覗き込む。

飾りのついたヘアゴムが見つかる。

それを乱暴につかむと隣の部屋の襖を開ける。

康太 「ひよりー！」

くつろいだ状態でスマホをいじっていた橘ひより（

11）、驚く。体勢を整えながら、

ひより 「（不機嫌そうに）ちよっと。急になに？」

康太 「ひより、俺のお年玉返せよ」

ひより 「は？ 知らないし」

康太、ヘアゴムを投げて、

康太 「証拠が出てんだよ」

ひより、ヘアゴムを拾って、少し嬉しそうに、

ひより 「あっ、私のやつ」

康太 「早く返せ！」

ひより 「だから知らないって」

康太 「じゃあ、なんで俺の部屋にそれがあんだよ」

ひより 「あんたが盗ったから」

康太 「ちげーよ」

ひより 「ってか、これ失くしたの去年なんだけど」

康太 「嘘つけ」

ひより 「ホントだよ……」

康太、ひよりのバッグをあさろうとする。

ひより 「やめてよー！」

と、康太を突き飛ばす。

康太、ひよりを睨む。

ひより、面倒そうに、

ひより 「あのさー、お年玉って……ママでしょ？」

康太 「え？」

ひより 「私のもないし」

康太 「は？」

ひより 「いつもママが『預かりまーす』って持ってくじゃん」

康太、黙っている。

ひより 「ママだって思うでしょ、普通」

ひより、わざとらしく溜息をついて、  
ひより「康太ってさ、本当そういうところあるよね」

ひより、ゆっくりと立ち上がり、康太に近付く。

康太「なんだよ」

ひより、煽るように、

ひより「決めつけてさ。俺が絶対正しい、みたいな？」

へアゴムを目の前でちらつかせて、更に煽る。

ひより「たったこれだけで？ 私が？ お年玉を盗った犯人？  
ざこ探偵なんですけど」

康太、こぶしを強く握る。

康太「……それだけじゃない」

ひより「なんですかー？ ざこ探偵さん」

康太「……さっき、母さんといたから違う」

ひより「はいはい」

康太「マジだから」

ひより、康太を疑うような目で見る。

康太「聞こえただろ？ 母さんに呼ばれて……」

ひより「で？」

康太「戻ったら、なくなってた。（強調して）お年玉だけ」

ひより「ママとずっと一緒だった？」

康太「一緒」

ひより「下で、何してたの？」

康太の目が泳ぐ。

康太「ちよっとした……用事だよ」

ひより「何それ」

康太「だからー、5分もかからずに戻ったんだよ」

ひより、康太を上から下まで見ながら、

ひより「なんか、隠してない？」

康太「……」

ひより、康太をじっと見る。

少し考えて、

ひより「まあ、いいや。とりあえず、ママに確認だね」

康太「ああ……」

2人、部屋を出ていく。1階におりていく後ろ姿。

## 内野家・リビング（昼）

橘さと子（40）、テレビ前のソファでくつろいでいる。テレビにはお正月の特番が流れている。リビングに入ってくる康太とひより。

さと子、2人に気付いて、

さと子「どうしたの？」

康太「あ、いや……」

ひより、さと子を真っ直ぐ見て、

ひより「ママ、確認んだけどさ……」

ひより、つばを飲み込む。

ひより「お年玉って、まだ渡してなかったよね？」

さと子、気付いたように、

さと子「あっ、そうだった。預かるから。持ってきて」

ひより、驚いて、

ひより「勝手に持ってたって……ない？」

さと子「そんなことするわけないでしょ？ 毎年、許可とってるんだから」

康太、ひよりを小突いて、

康太「ほら」

ひより、動揺した表情。うなだれる。

さと子「なに？ どうしたの」

康太「ごめん、なんでもない。後で持ってくる……」

康太、ひよりを引っ張り、2階へ行くとする。

さと子、出ていこうとする二人に向かって、

さと子「ねえ、ちょっと待って」

康太、振り返らずに、

康太「なに？」

さと子「まさか……失くしたとかないよね？」

ひより、ビクッと体に力が入る。

2人を見据えるさと子。

康太、振り返り、ひきつった笑顔で、

康太「まさか。そんなわけ——」

康太が答え終わる前にリビングのドアが開く。

内野稔（74）、何かを探すように部屋に入って、  
稔 「さと子、俺の携帯知らないか？」

さと子 「知らない」

さと子、目線はテレビに戻っている。

稔、二人に気付いて、

稔 「お、どうした？」

ひより、康太、稔を見上げる。

ひより 「おじいちゃん……あのね」

と、何か言おうとする。

康太、慌てて、

康太 「なんでもない」

と、ひよりを強引に引っ張っていく。

稔、2階にあがっていく2人に声をかける。

稔 「一緒に、外行くか？」

康太 「……あとで」

稔 「声、かけろよ」

康太 「分かった」

ひより、不安気に稔の方を振り返る。

康太 「ひより、いいから」

康太、ひよりを引っ張っていく。

#### 4.

##### 内野家・ひよりの部屋（昼）

ひより、康太の方を見る。

ひより 「お兄ちゃん……」

康太、何も答えない。

ひより 「ママじゃなかった」

康太 「ああ……」

ひより、部屋をウロウロしながら、堰を切ったように、

ひより 「どうしょ。絶対ママだと思ってた。どうする？ なんで

？ いつ？ お年玉失くすとか、普通ないよね？ いや

いやいや、ないね。うん、ない。私の人生で初」

康太、見守る。

ひより 「ってかさ、ママはいつも許可とってたの？ 『預かりま

―す』ってあれは許可なの？ 断っていいやつなの？  
『ダメで―す』って言える？ 言えないよね。言えない  
……ない」

力なく座り込む。

ひより「私のお年玉、どこ？」

沈黙。

康太、ひよりに近付く。肩に手をおいて、

康太「お前さ、じいちゃんに言おうとすんなよ」

ひより「だって……」

と、康太の方を見る。

康太、ひよりと視線を合わせて、

康太「じいちゃんは、優しいんだよ」

ひより「うん。そして、たまに天然」

康太「だから、もし言ったら、またくれちゃうんだよ」

ひより「だね……」

康太「それに、すぐ失くしたって……」

ひより「ヤバいね」

康太「ガチでやばい。いいか。これから、俺たちは……」

二人「運命共同体」

ひより、康太、握手する。

康太「よく考えろ」

ひより「この家の中に犯人がいる」

康太「俺でもない」

ひより「私でもない」

康太「じいちゃんでもない」

ひより「ママでもない」

二人、同時に立ち上がる。

お互いに目を合わせて頷く。

隣の部屋の襖を開けながら、

康太・ひより「犯人はお前だ！」

橘慧（9）、テレビゲームをしている。

面倒そうに二人を見上げ、

慧「さっきから、丸聞こえなんだよね……」

(つつく)